

令和6年度 第1回玉野市工業振興会議 概要

日 時	令和6年9月 30 日(月)13:30～15:30
場 所	産業振興ビル3階 展示会議室
出席者	別紙名簿のとおり
概 要	以下のとおり

1. 開会
2. 大倉 産業振興部長あいさつ
3. 議事
 - (1) 事務局3団体における令和5年度事業について
 - (2) 事務局3団体における令和6年度事業について
 - (事務局3団体から説明)

船倉会長

令和6年度事業中間報告のうち、「たまの未来塾」について、参加者 52 名はどのような内訳になっているか。個人事業主や起業家はこのうちのどれくらいいるか。

商工会議所

把握していない。

船倉会長

今日、コワーキングスペースの「うのベース」を利用してところ、たまたま生成 AI 活用のイベントを実施しており、若い人が 10 人ほど集まってディスカッションをしていた。商工会議所が実施している「たまの未来塾」の参加者に、いわゆる起業家の人が含まれているとしたら、このような場をうまく活用したら良いと思った。こうした拠点には、様々な業種の人が集まるため、イノベーションが起こりやすい。今日のイベントの参加者にも、デザイナーやフリーランス、IT 企業の社員など、いろいろな人が来ていた。うのベースのオーナーが造船業出身で、玉野を良くしていきたいという思いではじめたという話を聞いた。せっかく近くに利便性が良く、企業誘致という観点と、起業家を生み出すという両方の側面で非常に良い場所があるので、商工会議所でも何かのイベントの際に活用すればよいのではないかと思った。

商工会議所

機会があれば紹介させてもらいたい。

船倉会長

玉野産業振興公社の実施する情報発信事業について、X や Facebook、Instagram を、インスタグラマーなどと連携して行っていくかが。自身も行政出身で、SNS での情報発信にチャレンジするが、行政

の SNS は見られないし、「いいね」がつかない。岡山大学に来て、学生に Instagram のアカウントの運用をお願いしたところ、1回の投稿に 1000 や 2000 の「いいね」がつく。学生は投稿に慣れているし、投稿頻度が大事で、年に数回の投稿だとまず認知されない。うのベースにはインスタグラマーがよく出入りしているとのことなので、そのインスタグラマーやインフルエンサーとコラボできれば、よりよい情報発信ができるかと思う。

船倉会長

玉野市の副業人材活用推進事業について、副業人材の活用企業が9社決定とあるが、応募自体は何社あったのか。

玉野市

まだ事業が浸透していないため、こちらからプッシュして集めた。

船倉会長

県内では今のところ唯一事例ということで、玉野市が初めての試み。副業人材という事業名だが、デジタル化にも大変効果があると考えている。遠隔地から伴走支援をしてもらえるようなものなので、すでに DX 化を達成しているような大手企業にそのノウハウを広範囲に教えていただけるというのと、ワーケーション事業とも組み合わせて、域外とも交流を深めていくと、イノベーションにも繋がるということで、この事業には期待しているので、また進捗を報告してほしい。

4. その他

(1)岡山大学における学生起点の脱炭素への取組について

(2)おかやまデジタルイノベーション創出プラットフォームについて

船倉会長

脱炭素に関しては、玉野の業界的にはまだ話題に上がることは少ない？

磯野委員

あまり意識していないというか、中国が大量の CO2 を排出しているところに日本が何かやって、地球のために良くなるのかという意識があり、国が脱炭素に関していろいろ言っているが、現実的に意味があるのかという気持ちが個人的にあり、そのために何かしなくては、ということには今のところなっていない。

船倉会長

そういう声はよく聞く。自動車業界はかなり進んでおり、サプライチェーンのいわゆる Tier1、Tier2、Tier3くらいまで CO2 の排出量情報を求められるという事例がカーメーカーから徐々に広がっている。造船の方はまだそうでもないということか。

宮原委員

我々の会社自体での脱炭素は、先ほど磯野委員が言った状況と同じだが、作っているものに対しては、親会社である三井 E&S のディーゼルエンジン、これは脱炭素に向けて各種の燃料だけのエンジンの製造に対して試行錯誤を繰り返し、脱炭素の挑戦を業界全体の動きとしてあるため、それに伴って、親会社から脱炭素に向けた製品になるように指示が来るため、それにに向けた新しい加工やものづくりへの取組はしているが、会社全体として CO2 をどのくらい出しているかの把握には至っていない状況。

船倉会長

企業の脱炭素の取組としては、省エネ、再エネがメジャーであるが、製造行程で出るエネルギーロス等を見直すにあたり、IoT ツールや生産管理システム、在庫管理システムが必要になるという話に行き着くことが多い。すると、自ずとデジタルトランスフォーメーションへの道が開かれ、脱炭素を考えることで DX に繋がるため、アプローチとしては効果的と考えている。その入り口としてカーボンフットプリント（以下 CFP）を広げたいと考えている。もし関心のある企業があれば、岡山大学生を派遣して CFP を試すことができるので、お知らせいただければ。

事務局 小笠原

ここまで、事務局3団体の報告と、岡山大学の取り組みについての情報提供をいただいたが、各業界の現状や、来年度に向けて、どういった事業展開を市に求めるか、今後の見通しについてなど、一言いただければ。

藤原委員

今年の年初は仕事の量が多かったが、夏に向けて落ち着いてきており、求人に関する緊迫度も落ち着いてきたと話す会社が増えてきた。当社に関していえば、おかげさまで仕事がたくさんある関係で人員を必要としており、担当者が求人疲れを出している。なだめながら進めているが、昨年度から仕事の省人化を図っている。AI に限らず、省人化を図れる設備を導入しながら、品質を確保するための投資を積極的にするために動いているところ。今後とも求人は続けていかななくてはならないと考えている。

宮原委員

最初に教えてほしいが、この会は工業振興委員だが、玉野市にはほかにどういう委員会があるのか。

事務局 小笠原

工業のほかに商工観光課が関わっているものとして、商店会の会議がある。市内の商店会の方から必要な支援や、賑わい作りの取組についての意見等をいただいている。

宮原委員

商業の委員会で今一番課題としていること、よく提言される内容にはどのようなものがあるか。

事務局 小笠原

この春開催した商業委員会の会議では、コロナ禍で人の集まりがなくなったため、今後商店街で催事を開催して人の流れを取り戻したいという意見があった。そうした中で、例えば築港では夜市を開催して人を集めて、各商業関係の店の活性化や、横のつながりを強化していきたいという話がある。また、やはり人手不足や後継者の問題が挙がっており、対策が必要ではないかという意見をいただいている。

宮原委員

大きく2つ課題が挙げられているが、この工業委員会でもどこの業界でも、人材の問題・雇用の問題が大きく上げられるのではないかと捉えている。先日、玉野を元気にしようということで座談会を開催し、その席に来られた代議士とお話する機会があったが、これからは地域の特性を生かした地域づくりを進めていく時代になっている。日本全国どこの地域も人材確保のため施策を練っているため、玉野もがんばっているが、他地域と同じことをしていたのでは効果が出ないと感じている。その時に話が出たのが、「これからは地域の特性を発揮した地域づくりを国策としても進めていく。その中で、これまで少し中心とは遠く位置づけられていた造船船舶用機器が、国策投資の中心に位置づけられるのではないかと」ということ。それは今の世界情勢等、いろいろな視点から考えて、船舶関係で日本の役割はより重要になるだろうし、造船業界は船を造るだけでなく、そこにおける設備投資の額、地域への貢献と人材確保、また防衛などを担っていく大きな業界であるため、今後国策の中心となることで、玉野はこれから将来や夢が描ける地域になるのではないかと考えている。

ご存じの通り、玉野は造船の町として出来上がってきた。百数十年の歴史を築いてきた地域であり、造船・船舶用機器にかかわっている人・もののウエイトは相当なものがあるわけなので、玉野が玉野らしさを出し、玉野地域として将来若い人たちに関心を持っていただける町になるためには、造船業界のウエイトが非常に大きい。だから玉野市においても、今取り組んでいる施策を大いに進めて、造船船舶用機器の業界がしっかりとがんばっていけるよう、これまでに出てきた諸施策を推し進めてほしい。

ただ、いろいろな組織があり、それぞれに皆さんががんばっている中で、各組織が一体化するとか、特に人材育成等においてもっとお互い情報共有することが必要ではないかと考えている。現在もバラバラとは言わないが、ちぐはぐな面も感じているので、そこをまとめて一つの土俵の中でいろいろな展開ができるように進めていけるのは、商工観光課の力ではないかと考えているので、ぜひ大いに活動いただければ、「玉野も捨てたもんじゃないかな」というふうに考えている。

磯野委員

玉野市がこれから行けそうな雰囲気というのは、今おっしゃったとおり、懇親会の席でも複数の方が言われていた。これまで造船業界がいまひとつ元気がなかったが、これから行けるんじゃないか、というときに人材がいらないということになっては困るので、玉野市として、ものづくりをする若い人が集まってくるような施策をしてほしい。今、施策報告の説明があったが、お金をいくら使ったと言う話だけでなく、効果的だった具体的な施策を何件か挙げてほしい。心に響くような分かりやすいことなら他の企業に教えたくなるし、他の企業も真似したくなる。

ものづくりの職人や技術者の育成には時間がかかる。だからこそ、玉野に住んでもものづくりに関係す

る仕事なら将来明るいといふ分かる施策を出してほしい。玉野市で就職したら家賃が安くなる施策はいかがかと、三年ほど前から提案している。大変だとは思いますが何か動かないと変わらない。潮目が造船の方に向いてきているのは間違いない。突拍子もないしお金がものすごくかかるかもわからないけど、何かやらないと玉野が前へ進まない。逆にこれをやったら前に進むのではと思ってこの件を提案している。ものづくりの技術者・技能者は一人前になるのに時間がかかるので、今すぐにでもそういう人材を玉野に集めてこない、「さあ！」と言う時に間に合わない。三井 E&S 建設業安全衛生組合のほぼすべての会社で技術者不足で、自社の売りである社風を守ったものづくりが非常に難しくなっているのが現状。玉野でもものづくりをする、覚える、勉強する、そうすれば玉野で食べていける、幸せな家庭を作れるとイメージできるような施策を発表してほしい。

前田委員

磯野委員が言われたこととつながる部分もあるが、自身も三井、三菱の協力会の専務理事の立場をいただいているので、2017 年、18 年、19 年からコロナを経てようやく戻って生きているという状況を痛感している。その流れの中で、やはり住む場所の問題は非常に大きな問題として残っており、三井は少しずつ元気になってきている関係上、社宅の改修や住む場所の整備を自社で行う動きがある。ただ、その中で、下請け企業を含めた協力会の会社の自社寮は 40-50 年前に建てられたものが多くなっているのも事実で、今の若い人が一人一部屋を好むのに対して、風呂やトイレが共同だったりする状況があり、寮があったとしてもそこに住まないため、その家賃負担がかかってくるなど、さまざまな場面でお金の問題が生じている。そのあたりを市と連携しながら、大手企業の下請け企業で働く人たちが住めるような場所の提供を全体でやっていくと、人も動きやすいし、働きかけやすい。

人を育てるのにかなり時間がかかる業界なので、先日からはまった JIS 溶接の講習のようなものは非常に助かっている。また、これまで岡山に行かなくてはならなかった玉掛やクレーンの講習が玉野でできるようになり、外的な部分で良い方向に整ってきていると感じている。あとはどうやって人を呼ぶか。今日船倉先生からいただいた「OI スタート」は、産学官連携してデジタル技術活用でイノベーション創出というのは非常に良い話だと思う。やはり今の造船業界はそういう部分が遅れていることもあるので、DX できるものは実施し、できないものは残して、絶対に人がやらなければならないものは残ってくる業界ではあるので、そのあたりを産業分野はもちろん、産学官の連携を一緒にしながら、良い方向に向かっていけたらと思っている。

「OI スタート」は、登録無料という話だが、それから先のマッチングに進むとそこで費用が発生する？

船倉会長

発生しない。専属のコーディネーターが 3-4 人くらいおり、企業の困りごとをヒアリングして、会員同士のマッチングや研究者とのマッチング、あるいは行政のこうした会に出てみませんか、といったようなコーディネートをしている。

前田委員

そこで企業同士がマッチングした後は、もう各企業同士の話ということか。

船倉会長

そういうこと。もちろん大卒はサポートするし、そういった意味では商工会議所の経営指導員がされていることと近いと思う。

前田委員

わかりました。今年は副業人材活用にも取り組んでいる。良い結果になるよう、努力していきたい。

事務局 小笠原

ご意見ありがとうございました。先日のものづくり座談会に参加させていただき、心に残っているのが、実は世界最先端の技術が玉野にあるという話を伺い、船の製造、エンジンを作る技術、安全に航海する技術の3つが玉野にあるということが、すごいことなのだとされており、感動した。新たなもの、新たな魅力が都会にばかりあるわけではなく、実は地域に、我々が百年紡いできた中に素晴らしい技術・残していかななくてはいけない技術があるというのを感じ、それをいかにして広報していくか、皆さんに伝えていくかというのが、行政として大きな役割を担っていかなければならないと考えている。その中で、先ほど挙げた、行政内の横の連携をしっかりやっていかなければならないと考えており、たとえば今年の7月に広報たまで市内の企業の新人社員の生活状況をPRさせていただいた。

また、磯野委員が言われたとおり、住宅事情に関しては、住宅を担っている都市計画課や、移住定住関係の部門と連携して、今までいただいている提言について、経過報告ができるよう、体制を考えていきたいと思っている。

最後に、産学官の連携が非常に重要と思っており、大学や教育委員会、民間企業の皆さんと一緒にどういった打開策があるとか、それぞれがどんなことができるか、案を出し合いながら一体となって玉野を盛り上げたいという気持ちは市としても十分持っているので、産学官連携を進めていく中で、ご協力いただきたい。

大倉委員

百年前、ここ玉野に三井物産さんが来て造船業というものづくりを始めた。それから檜垣県知事が宇野港を開き四国の玄関口とした。私も玉野で生まれ育って六十数年経つが、子供のころ造船業は華やかだった。それが昭和五十年代、世の中はバブルに向かっているのに造船不況になり、昭和63年4月には瀬戸大橋ができ、四国の玄関口だった宇野港は覇権を失い沈んでいくのを見て育った。しかし最近、先ほどの代議士の言葉のように玉野の造船業は世界最先端の技術があり、ものづくりの町として絶対残していくべきだ。ではどのように残していくかという時に大きなヒントとなるのがアートの力だ。

今から三十年前、造船業と宇野港ができて百年という節目に、福武さんが直島に入ってきて、今ではアートを通じて世界中から人々を引き寄せている。この大きな流れの中で、ものづくりでは沈みゆくあった玉野市が観光産業において希望の光が見え始めた。街中に移住者がおしゃれなお店をされ、宇野港土地さんがホテル(UNO HOTEL)を作られた。さらに、大勢の方が玉野へやって来られるのを見て、大手IT産業ミクシィの100%子会社のチャリットが30億円を投資し、玉野市所管の競輪選手宿舎をホテ

ルに建て替え(KEIRIN HOTEL)、観光産業に参入した。

こうした影響は産業誘致にも及び、パワーエックス社が玉野市に工場を建設した。伊藤社長にその理由を聞くと、「東京以外の地方で、世界中から人々やエンジニアを呼び寄せられる場所がないかと日本中のザ・工業団地を見に行ったが、人が来てくれそうな場所がなかった。玉野に来てみたら、瀬戸内の風光明媚な景色、アート感、若い人たちのお店など、外から見るとすごくおしゃれな街で、ここなら人が呼び寄せられると感じた。また百年間ものづくりでやってきた最先端の製造業、企業群によるものづくり文化もある。その両面でもう一発で玉野に決めた」。去年パワーエックス社さんが求人募集をした時は、数名程度の求人に対して二千人が応募したそう。玉野にはものづくりのイメージがあり、最先端事業であると発信さえできれば外から人が来てくれるのではないかと。

パワーエックス社は世界に情報発信し人を引き寄せるために、世界的建築家の妹島和世さんも入れてオープンファクトリーを実施する計画があり、そうなれば玉野市がアートを介してもものづくり文化を発信する拠点になる。折しも来年は瀬戸内国際芸術祭があり世界中から観光客が訪れるので、玉野市としても宇野港、パワーエックスさん、みやま公園を瀬戸芸会場に含み、観光客が市内を回遊する仕組みをしっかりと作ろうと思っている。さらに翌年以降は瀬戸内産業芸術祭を計画しており、パワーエックスさん中心にオープンファクトリーを行って玉野からものづくり文化を発信したい。今ちょうど大きな流れとしてこれからの百年とならんような起点に来ている。玉野はものづくりとしてもすごいし住んでも楽しい、家族で引っ越してきたくなるような街作りを推進したいので、引き続きご協力やご意見を頂きたい。

船倉会長

施策を作ろうと思うと先立つものが必要なので、ふるさと納税、企業版ふるさと納税を活用して、住宅の手当に使うなり、企業誘致に使うなり、具体的な検討をぜひ実施していただき、皆様のご意見をいただきながら、次の回でぜひそういった新しいわくわくするような具体的な施策について議論したいと思う。また、この会自体にパワーエックスを呼ぶと議論になるのではないかと以前から感じている。

大倉委員

社長は難しいが、部長がいらっしゃるので、声をかければオブザーバー参加は可能だと思う。

船倉会長

岡山大学とパワーエックスは最近密にやりとりをしていて、学長を含めて、定置用蓄電池を中山間地域でエネルギーマネジメントに使ってはどうかという議論をしている。また、電気輸送船が実現すればすごいこと。そこに玉野というブランドが確立すると思う。そういった、未来に向けたわくわくするような話を是非この場でできればと思っている。

川端委員

私は令和5年4月から玉野市工業振興会議の委員となっていたが、リアルの会議に参加したのは今回が初めてで、活発な意見を聞き、勉強になった。岡山県工業技術センターは、岡山県が運営する技術支援機関で、玉野市の企業も良く利用されている。岡山大学からの紹介でもあったとおり、脱炭素や

DX をしないといけないというのは、県庁からも言われるが、玉野市の会社でもそうだが、そうした時流への対応よりも、実際にはものづくりの基礎の基礎の部分で困っているという話を聞くことが多く、たとえば金型の話や加工の話が寄せられる。パワーエックスが玉野に立地して、ニュースを見ると華々しく、すごい経営力があると見える一方で、財団に連絡をくれるのは、社長ではなく、現場でものづくりにかかわっている社員。リアルな相談を受けて、最先端の部分でもなく、「やはりこういうことで困るんだな」というお話を聞くことが多く、リチウム電池や最先端技術がどう変わろうが、ベースの技術というのは必要ということを感じた。

住宅の話についても興味深く聞いていたが、働いているのは人間なので、生活が楽しくなくては。船倉先生が仰ったが、わくわくするような生活というのが見直されていると考えていて、それはふざけているというわけではなく、お金とはまた異なる充実感という価値だと思うが、それを大事にして、自分自身も仕事をしたいし、玉野市の会社から技術相談があれば全力で対応したい。

宮原会長

先ほど船倉会長から企業版ふるさと納税の話が出たが、玉野商工高校機械科が三井 E&S のふるさと納税でできた。やはりものごころついたころからものづくりに関心が持てる環境づくりが必要と考えている。高校生になってインターンシップの中で職場見学をする前に、生まれたころから造船、ものづくりといってインプットしていく必要があると思う。ご存じの通り、玉野には東からナイカイ塩業があり、北興化学があり、三井 E&S があり、製錬所があり、これだけ企業があるので、そうした企業にご協力いただいて、どういう形になるのかわからないが、日本中で活躍してる企業がこれだけあるので、もっと力を借りて、ものづくり体験や玉野の歴史を学べるような場所が作れないか。

大倉委員

その辺が先ほど申し上げたオープンファクトリーにつながる。パワーエックス社さんは通年でものづくりを見せるサイトであり、すでに日比町から小学生の遠足が来た。そういったところからものづくりを覚えていくので、例えばモニターツアーとして、年に 1 日～2 日、パワーエックスさん、宮原さん、ナイカイさんととりあえず 3 ヶ所ぐらいでもものづくりを見せていく、可能であればワークショップもやるというような産業観光のヒントになると考えている。今言われたものづくり資料館を一箇所作ることも当然可能性としては今後あるだろうが、まずはオープンファクトリーをスタートしたい。最近産業観光が流行っているので、オープンファクトリーと併せて玉野市内で回遊できるような仕組みを作りたいと思っている。

宮原委員

人材確保が難しくなってきた、今までは外へ出て行って人を呼び込むということとしていたが、自分のところへ生徒さんやいろんな人に来てもらうというように考え方を変えていくという話を三井がしていたが、いろんな動きの情報仕入れて、何か新しいものが生み出せるようにご指導頂きたい。

事務局 小笠原

ありがとうございます。市内にこういったものづくりの会社があることをどう伝えて人を呼び込んでいく

かが一番大きな課題と考えている。またこれを将来持続可能にしていくためには、今手を打たなくては
いけないと今日の会議で強く感じた。今後我々ができる施策、また一緒にできる施策を一緒に作り上げ
て行きたいので、今日頂いたご意見を参考に考えさせて頂きたい。

船倉会長

私も参加させて頂いてから二年くらい経つが、本当に半年に一回しかない貴重な場所だと思う。私
わくわくと言う言葉が大好きで、いま未来に向かって今後百年というスパンで考えると、今までやったこ
とがないことにリスクを取ってチャレンジしないことには、なかなか難しい状況だと思う。国の政策をにら
みながら是非前向きに一丸となつてできると思うので、大学で今後使えそうなプロジェクトがあればご紹介
したい。

5. 閉会

事務局 小笠原

ありがとうございました。それでは、以上をもちまして令和 6 年度第 1 回の玉野市工業振興会議を終了
させて頂きます。委員の皆様方におかれましては、円滑な進行、ご協力をありがとうございました。